

---

# 魔王な義父と勇者なアイツ

一色彩

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔王な義父と勇者なアイツ

### 【Nコード】

N3251Z

### 【作者名】

一色彩

### 【あらすじ】

魔王の義父を持つ、自称魔族の少女　　ファイリア。魔王の最後の頼みにより、勇者はファイリアを人間界に戻すと約束をしたが……？

魔族と人間の、決して交わる事のない心。じりじりと迫るような二人の恋模様を描いた、ラブファンタジーです。少女視点になります。

それなりの短編にする予定です。

勇者と魔王。それは、多分どんな世界でも……この間柄の意味を理解しているのではないだろうか。

魔王は人間を滅ぼし、絶望を与え　勇者は人間を救い、幸せを与える。魔王は悪で、勇者は正義。それが……世界の、“理”。

でも、あたしには理解出来ない。魔王……魔族だけじゃない、勇者だって、人間だって魔族を殺す。それなら勇者は悪で、魔王は正義にもなるはずだ。なのに　どうして？　どうして、魔族が滅ぼされなければいけないの？

魔族が、人間より強い力を持っているから？　魔族が、人間と違う見た目だから？

ねえ　本当の悪は、どっちなの？

シャンデリアが輝く、とても広いこの部屋。王座の間とも言われるこの場所で、あたしと父上、勇者、そしてその御一行が、

睨み合いながらそこにはいた。

血だらけになって、床に倒れこんでいる父上。ボロボロになりながらも、剣の切っ先を悠然と向ける勇者。……あたしはその間に立ち、父上を庇うようにして震えていた。

「退け、フィーリア！」

父上の、今にも死にそうな掠れた声。

「退かない……！ 絶対っ……絶対嫌よ……！」

あたしは震えたまま、父上に逆らう返事を返した。……だって、ここを退いたら、父上は死んでしまうんでしょう？ 血の繋がらない、しかも人間のあたしを……本当の娘のように育ててくれた人なのに 　みすみす目の前で殺させるって？

できるわけがない。……できるわけが、ないっ！

あたしは魔族。父上　魔王の娘で、それ以上でもそれ以下でもない！

「あ……あたしの名前は、フィーリア・エンジェル・マールヴォロ・オコナムカ。勇者、あたしと勝負よ！　絶対に父上には触れさせないわ！！」

「退くんだフィーリア！」

「っ　いくら父上の頼みでも、聞けないわ……！　さあ勇者！　父上を殺したくば、あたしに勝ってからにしろさい！！」

「……いいだろう。女だろうと、手加減は一切しない」

「っ……！　止める　話を聞け、フィーリア！！」

一触即発。

それぞれがそれぞれに対して、そんな感じなのだろう。

ごめんなさい父上　でもあたしは、絶対引けないの。勇者があ

らわれ、魔王退治の旅に出かけたと情報があつたあの時から あたしの覚悟は決まっていたんだから。あたしは父上に恩返しをしないくちやならない……ううん、恩返しをしたい。

だからあたしは命をかけて戦うし、死んで構わないとも思っている。これもすべて、愛する父上のため 絶対やらねやしない。

あたしと勇者は、睨み合った。あたしよりも遥かに高い勇者は、こちらを見下ろすようにして……上から下まで見定めていた。対するあたしも、勇者を見上げるようにして、その風貌を観察する。

何もかもが、父上と正反対だった。白銀の髪、髪型はショートカット、キツネのような細くて鋭い真っ青な瞳……。見れば見るほど、整っていると痛感するその顔は。あたしが惹かれる要素が何一つとしてなかった。

あたしは父上のような、闇のように真っ暗で、艶やかな長い黒髪が好き。あたしは父上のような、血のように真っ赤で、タレ目の暖かなまなざしが好き。

全部、全部、違う。

嫌いだ……とてつもなくこいつが、嫌い。

「っ　勇者。お前は言ったな、人間のために自分は生き、魔族を滅ぼすのだと」

「そうだ。だから俺は、倒しに来た……お前を」

「今の言葉　偽りはなかるうな。なら……我が娘は、守るべき対象に入るわけだ」

目を見開く勇者と、その一行。

「我が娘に、私の血は混ざっておらん。もちろん魔族とも」

「　人間、だと？　この人並外れた魔力を、惜しげにもせずだ漏れさせている……この娘が」

勇者が、あたしを見ながらそう言った。あたしは威嚇をするように、重たい魔力をゾロゾロと……さらに溢れさせる。

「こやつの本当の母は、異世界人だ」

「まさか……」

「そう。異世界人は魔力を必要とせず魔法を扱う。それは漂う魔力を扱うからだ。そしてその娘は、同じように魔力は一切なかったが……育つにつれて、魔力を己に溜めていった。魔力の溢れるここ魔界で過ごしていれば、この量になるのは当然のこと」

その証拠に、我が娘の瞳は黒かろう？ 父上はそう言って、顔だけ振り向いたあたしを見ては、ほほ笑んだ。

……父上は、この瞳をいつも褒めてくれたよね。あたしはルビイのように輝く、父上の真つ赤な瞳が羨ましかったけど。父上は私の瞳を、「黒曜石のように輝いてとても綺麗だ」と褒めてくれた。だから……誇りだったんだ、とても。

そして……逆に、父上との繋がりはないと証明してしまう、憎いもの。

「勇者 娘を人の世界に、戻してはもらえないだろうか」

「父上！？」



「了承してくれるならば、私は喜んで死を受け入れよう。もちろん私の命は、他の者に殺させるが。それくらいの意地は、通るだろう?。」

父上が何を言っているのか、全く理解出来なかった。あたしは愕然として、ただひたすら固まる。

人の世界? 日々のほんとして、同族同士で殺し合いをするような、馬鹿な集まりの場所へ行つて。あたしに住めというのか。……何を、考えてるの? それであたしが………幸せに過ごせるとても?

私はか細い声で、何回も繰り返すように呟く。

「いやよ……絶対……いや……。」

「勇者、頼まれてくれるか?。」

「……………約束しよう。」

パニックになったあたしは、間近に立つ勇者さえも忘れ、父上にあらんかぎりの大声で言い放つ。

「つ、勝手に話を決めないで！ 言ったでしょう！？ あたしは魔族よ、父上！ 誰がこいつらみたいな愚かな人間の住む地に！！！」

その時、「フィーリイ」……と、父上があたしを愛称で呼んだ。あたしは未だに流れる涙を拭い、父上を見る。

「フィーリイ、私の愛しい娘」

「……ちち、うえ」

「よくお聞き、フィーリイ。お前の母は……異世界から来て、人間の世界で上流貴族と結婚をしたんだ。彼女と私は、言わば悪友……だか私は、彼女に心底惚れていたんだ」

母の話聞くのは、久し振りだった。あたしは黙ったまま、耳を傾ける。

「彼女が人間と結婚したのが、憎らしかった。相手も、彼女も」

「……父上？」

「私はね、どうしても欲しかったんだ。彼女が。……だから、殺したんだよ」

殺した、そう言い放つ言葉は……とてつもなく重たく感じた。今まで聞いていた、そんな状況のそれより、一番重く、辛い。

「しかし、殺したあとで気付いたんだ。無防備に泣く、お前の存在に」

「……」

「愛しいあの人の子供。しかし、世界一憎い男の子供でもある。……葛藤した、すごく」

「いやだ……聞きたく、ない……」

「だが私は、殺さなかった。我が娘として育てようと、誓ったのだ。……私が言いたい事が、わかるな？　フィーリイ」

あたしは、咄嗟に耳を塞いだ。

父上の、言いたい事。それは……魔族の“掟”についてだ。魔族にとって、掟がすべてであり、すべては掟。縛られているとも言えるが　魔族全員が、それを誇りに思っている。

魔族の掟　それは、憎しみだけで人間を殺さない事。人間を殺していいのは、自分の血族、親しいものが辱められ、暴行、または命を落としてしまった場合のみなのである。

そして、もう一つ重要な掟が、一つある。親、または兄弟が殺された場合……絶対に犯人を見つけだし、殺さねば……ならない……。

「……」

「フィーリイ……私の天使。お前は自分が魔族だと言った。ならば、やることはわかっているね？」

「で、でも……！」



父上の吐く嘘くらい、あたしにだって見破れるのよ？ だってあたしは……父上の娘なんだから。

「……愛しい娘には、敵わないね」

「……じゃあやっぱり……！」

「しかし。お前の父のほうを殺したのは、紛れもない事実だよ。

……お前の母はね、殺されたんだよ」

お前の父親にね。

その言葉があたしの頭に浸透するまで、いったいどれだけ時間が掛かった事だろう。……あたしの本当の父が、母を、殺した？ 何故？ どうして？ 意味が……わからないよ。

呆然とするあたしに、父上は続けて言った。

「彼女と俺は、紛れもなく愛し合っていた」

「！」

「だが、彼女は異世界人。人間の敵である魔王と結ばれるなど、言語道断だった」

「……そんな……こと」

「彼女に 選択の余地はなかった。苦渋の末にその上流貴族と結婚し、子供を生んだんだ。そう、お前だよ」

……ああ、頭がパンクしそうだ。

「しかし旦那は、それに気付いていた。彼もまた彼女を愛し、またかなり嫉妬深い男で」

「それで、母さんを……殺したの？」

「……そうだ」

そして母が死んだと知った父上は、怒りに狂った。母を守れなかった苦しみや、たとえ人間と魔族でも構わないと言えなかった後悔すべてが交ざり合って……。

気付いた時には、その手をあたしの父の血で染めていた。

「掟はたしかに守ってはいる。だから私に、間違いなどない」

「……」

「愛しい娘、私の天使。……お前はどちらの選択をとる？　フィ  
ーリイお前は……魔族か、否か」

魔族か……、人間、か。もう父上は、嘘を吐いていないだろう。

あたしが自分を、魔族だと思うなら。それは親を殺された場合、犯人を見つけたし、殺さねばならない。そう　人間でも、たとえ同族でも。つまりあたしは、父上を……“殺さなくてはならない”。

……それが、出来ないならば……。あたしは自分を　人間だと、認めなければならなくなる。



「父上……あたしは……」

「フィーリイ。愛しい愛しい、私のたった一つの宝物」

あたしは父上の、美しい血の瞳を見た。

「お前の父を殺したあと、泣きわめく小さな存在に気付いてとても後悔した。愛しい人の大切な子の、唯一の親を殺してしまつたから、強い罪悪感に苛まれたんだ。その赤ん坊は悲しみにくれ、泣いているようにみえた」

「……」

「しかし、その子は私が抱き上げた途端……ピツタリ泣きやんだ。あろうことが、笑ったんだよ」

「え……?」

「希望の光が見えた気がした」

その時の事を思い出したのか、父上の表情には、小さなものを慈しむ……暖かな安心感があった。

「お前だよ、フィーリイ」

「！」

「私は決めた。愛する彼女の子を、幸せに過ごさせてやろうと。……それが私に出来る唯一の罪滅ぼしだから。フィーリイ、私の宝物。お前は時を重ねることに、本当に彼女に似ていく……しかしその髪だけは、父のもののまま」

あたしはまた、気付いてしまった。父上が　なにを言おうとしているのかを。だから……やめて、それ以上は……言わないでよ、父上っ……！

「　　聡明なお前の事だ。わかっているね？」

「……魔王の血には、膨大な魔力と力が、備わっていて……。それを飲むと、その者は……それを受け継ぐと同時に、魔王の証であ

る黒い髪になる」

「そう。私の血を飲めば、髪は闇のように真っ黒になってしまふ。……フィーリイ、残り少ない後生の頼みだ」

父上の赤い瞳に　あたしが映る。

「お前は私の子、その証明を……私に出来ないだろうか」

「でも、そんなことをしたら……父上は」

「ああ。死ぬだろうね」

「っ！」

フィーリイ。

父上の、弱々しい呟くような声。命がもう僅かだというのが……見て、取れた。

「愛しい愛しい、私の娘」

「……っ」

「私はお前と過ごせて……とても幸せに満ち溢れていた。本当の我が子を授かったかのようで、毎日が光り輝いていたよ。毎日をお前と過ごし、毎日を笑顔でいさせてくれた。それは私にとってかけがえのないもので、もうこれ以上の幸せは……ないとさえ思った」

「い、いや……いやだっ……父上……！」

「頼む……これからもお前が、私の子だと……思わせてくれないだろうか？ 私はお前の　フィーリアの父親だと」

選択肢は、なかった。

ああ、父上。あたしは本当に貴方が好きでした。なによりも誇り高く……自慢の父でした。あたしは貴方以上の良い父親を、知りません……父上のおかげでとても幸せに育ちました。

あたしが魔法を使って初めて料理した時、喜びながら食べてくれましたよね？　あたしが友達と喧嘩をして、落ち込んでいた時……一日中慰めてくれました。

父上、ああ、父上。あたしも欲しいです……父上の娘だという、たしかな証明が。



あたしは。

すでに、血を大量に流している父上の血を……すべて吸い上げた。  
「ぐくり、ぐくりと、喉を鳴らしながら。」

「 ああ。私の……愛しい……娘」

父上の手が、あたしの髪に触れる。その髪は 長年憧れ続けた、  
父上と同じ色だった。

「……幸せに……生きて、くれ……」

そして、父上は。

闇に溶けるようにして、父上は……その形を失っていった。

サラリと肩から流れる、あたしの髪。艶のある真っ黒な、あたし

の大好きな色。

父上の、娘だという証明。

「つう……く……！」

「……行こう、時期この魔界も……」

「う……あ……あぁっ！」

闇夜に浮かぶ丸い月。その日、あたしは父上を殺した。  
あたしは、正真正銘の魔族になれた……嬉しさで、はち切れそうだ。

でも……どっしょっ？

「ひっく……うっっ……おとっぴゃぁん……！」

ヤンコッピ、じゃなほくるっこのっ。





「  
うああああん！ とつさああん！ わああああん  
」！

「ううして、魔界の夜はふけていく。」

一（後書き）

タイトルに魔王と書いてあるにも関わらず、速攻死ぬ父上（笑）

マジごめんなさい。

## 二（前書き）

ここから少し明るくなって来ると思います。

シリアスのがまだまだ多いでしょうが、頑張っ  
て笑い要素も挟んでいこうと思いますので、よろしく  
お願いします。

人間界のとある宿舎。

勇者率いる四人の男女含むあたしは、同じ部屋でのんびりとくつろいでいた。……精神的には、まったく寛げてはいないけれど。

「勇者あ、ねえ、ちよこつとでいいのよ！ デートに行きましよう?」

「断る」

「んもう冷たいんだからあ！ でもそんなところが堪らないのよねえ」

「すり寄るな」

お色気ムンムンの姉ちゃんを、ペーイッ！ と投げる勇者。女は、わざとらしく「よよよ」と泣いていた。……楽しそうで、なにより

である。

あれから、あたしは勇者御一行に連れられて、約束通り人間界へ来ていた。向かう先は、勇者の故郷でありこの世界一番の国であり、勇者御一行に魔王退治を命じた王様のいる　パリシュという国。

あたしはこの数日間、この人間どもとはまともな会話をしていない。……というか、する気になれない。向こうもその意図をくんでくれているのか、執拗には話をかけてこなくなつた。

……一人を除き。

「　それでなんと！　その時勇者が颯爽と現れて、言ったのよ！　“俺は人間だ。お前らまじよくに味方する疑問はない”　って！　笑っちゃうわよねえ、“まじよく”　って！　真剣な顔して噛むんだもの、私大爆笑しちゃった」

……この、勇者が目前にいるにも関わらず、赤裸々すぎる笑いネタを話し文字通り大爆笑をする少女。勇者御一行のメンバー、勇者の幼馴染みで女剣士でもある、マリンベール・デルバルドだ。

パリシュの国の間近にある、デルバルド孤児院……彼女はそこで育つたらしい。もちろんこれはすべて、自分が勝手に話した内容。

あたしは何一つ聞いてないし、むしろ反応すら返していない。

……なのに。彼女はしつこすぎるくらい、懸命に話をかけてくる。以前「関わるな」と言ったにもかかわらず、彼女は笑うだけで変わらずこの状況にある。

溜め息がでそうだ。

「あっ、そうそう。それでね」

「……おい」

「そのあと勇者つたら、自分が間違えたくせに逆切れして」

「……おい」

「なんと風の魔法で町を全滅しかけたのよ！ 大変だったわあ」

「おいつて」

あたしは、話をまったく聞かないマリンベルに、声を掛けた。

こいつはなんなんだ、アレか？ ただの話好きなのか？ 相手が反応してくれなくても、自分が話せば良いという人種か？ ……

勘弁してくれ。

とにかくもう一度抗議をしてみようと試み、「前にも言ったが」……と言いかけた。しかしそれは、彼女の腹いっぱいの声量により、無残にもかき消される。

「え？ わつ、珍しい！ 口を聞いてくれたわ！！ みんな〜！  
フィーリアちゃんが喋ってくれたよ！」

そんなマリンベールの言葉に、この部屋にいる全員が振り向いた。……あたしは見せ物か？ 少し泣いてもいいか、これ。まあ人間なんかの前ではもう泣くつもりはないのだが。

しかし、これはいい機会だ。だからあたしは、全員に向かって言った。

「父上が約束させたのは、あたしに人間界へ行くようにしてほしいと言っただけだ。だからあたしは、もう別行動をとる」

「……あーらあ、随分勝手な小娘なのねえ。つまらないのは顔だけにしなさいな、お嬢ちゃん」

はぁ……出たよ、このいかにもなキャラクターの女。

こいつは、先ほどから勇者に媚びを売っていた、お色気ムンムンの踊り子だ。たしか名前は……ジュエリー・クリアウオーターとか言ったか。

クソ生意気な人間だ、あたしの一番嫌いなタイプである。見ただけで分かる……こいつは忠誠心でここにいるわけではなく、ただ勇者が好きだから付いて来ているのだ。

……吐き気がするな。

あたしはお返しのため、虫酸の走る女を睨みながら……ニヤリと笑って言った。

「お前も、冗談は胸だけにすんな。……そこに魔力なんか詰めて、なんのギャグだ？ オバサン」



それを言った瞬間、オバサン　ジュエリー・クリアウオーターが青ざめた。多分、バレてはいないと思っていたのだろう。……馬鹿にするのも程々にしてほしいものだ、そんな明らかに魔力が見えている胸をさらけ出すなんて。魔族では、最高級の恥だぞ……そんなものは。

こいつが魔族じゃなくて、心からホツとする。

「貴女……！ “視た”のね！？」

「……視た？ それは人間の使う分析の魔法のことか？　あたしがそんなものを使わないとわからないほど、低レベルだと思ったのか……オバサン」

……たしかにあたしは人間で、魔族ではないのかもしれない。でもあたしは魔界で過ごして、日々鍛練に明け暮れた。とくに魔法に関する事は、人間の誰よりも、父上よりも知識や技術は高い。

この、ジュエリー・クリアウオーターとかいう女。ただ普通にしているだけで、所々偽装しているのが丸分かりなのだ。とくにあの哀れな胸。……哀れすぎてなにも言えない。

その時。突如誰かがあたしとオバサンの間に、割り込む。  
…勇者だ。

勇者はジュエリー・クリアウオーターを庇いながら、あたしを見て言った。

「俺の仲間を愚弄するな」

「先にあたしを愚弄したのはどっちだ」

「……魔族の、“やられたらやり返す”、か？」

「ああ。身体は人間でも、あたしは心の隅から隅まで“魔族”だからな」

クツ、と。

皮肉げに笑う。

「……だが、お前の父は人間に戻れと言った」

「違う」

「魔族であることは許されない」

「うるさい」

「……お前は、人間だ。フィーリイ」

「あたしを……フィーリイと呼ぶな!!」

そう呼んでいいのは、父上と、仲のいい魔族だけ……! たかが人間ごときに呼ばれるなど、許されていいことじゃない! ……虫酸が走る、気持ち悪い。

「あたしは魔王の娘で、魔族だ! この、魔族殺しが!!」

「……」

「あたしは一人で生きる。お前人間に世話されて、家畜同然になるならば……死んだほうがマシだっ!!」

あたしは飛び出した。追いつかれないように、姿隠しの魔法をかけて。

……ムカつく。あのすましたような表情が。人の父親を窮地に追い込んでおきながら、あの態度！ ああ、腹が立ってしょうがない！！

「フィーリアちゃんっ！ 待ってください！」

マリンベールの止めるような声すら、完全に無視して走る。……もう、放っておいてくれ。こんな地獄みたいなこと あたしには、耐えられないんだ。

頼むからもう、一人にさせてくれ。

「なんでっ      あたしは」

走りながら、独り言を呟く。

「あたしは　！　どうしてっ……」

なんで。

なんで、魔族じゃないの……？

「っ……父上えっ……」

息が枯れるまで、あたしは永遠と走り続けるのだった。

走り続けて、小一時間経っただろうか。人気のない森の中、  
ちょうどいい所に湖があったので、あたしは休憩とばかりにそこで  
水を飲んでた。

ヒリヒリして痛む喉を押さえながら、一人ごちる。

「……はあ」

父上、何故あたしを、人間界に戻すと言ったの？ あたしが、耐えられるはずがないと、わかっているながら。……ヒドいよ、生きてくれ、なんて。

馴染めるはずがないとわかって、どうしてそんなことを。

「……父上……」

湖に映る、自分を垣間見る。……母から譲り受けた黒い瞳、父上から受け継いだ黒い髪。まるで本物の異世界人だ。

太陽の光を綺麗に反射するその湖を見つめながら、あたしは人知れず溜め息を吐いた。

「どうしたらいいと……言つのだろう」

あたしは魔族で、でも人間で。絶対相容れる事のない存在の間に、あたしはいる。どうやって生きればいい？

「……はあ」

ここへ来て二度目の溜め息を吐いた時、それは唐突に現れた。

湖からひよっこり現れる、水色の小さな物体。……水の精霊か。久し振りに見たな。

「あれね？ 貴女は魔王様の箱入り娘さん。あ、この度は魔王様がご臨終なされたとかで……お悔やみ申し上げますなの」

「……どうも」

「にしても何故人間界に？ たしかに貴女様も人間ではありませんけど、あれほどお嫌いでいらっしやっただけでは？」

「……深い事情が、あつて」

「そうですね。それはそれは大変でございますねえ。お悔やみ申上げますなの」

……、深くは言つまい。精霊とは、皆このような感じなのだから。精霊に悪意はなく、感情を左右される事は全くない。

多少抜けていると思えば、見方は可愛くなるだろう。私はそう解釈をして、折り合いをつけている。

「ああ、そうそう。先ほど勇者一行が近くの町で、人を探しておりましたの。黒髪に黒い瞳だそうで」

「……へえ」

「どうやらまた異世界人が紛れ込んだご様子ですねえ。そう言えば姫のお母様も異世界人だとか」

「……ええ、まあ。あまり話は聞いた事ないですが」



「いやはや、今年の異世界人はどんな伝説を作ってくれるのでしょうかねえ……楽しみです。あれね？ そう言えば姫、髪をお染めになったのですか。まるで異世界人のようです」

「……。父上の申付けで、勇者に倒される前に、私の血を吸え……と」

「はあん、なるほど。それで魔王様の力と色をお引き継ぎに」

……もう一度言おう。深くは言つまい。もちろんあたしも、ツツコミたい気持ちはわかる。が、精霊全般はこんな感じなのだ。むしろツツコミを入れたら負け。絶対夜が明ける。ナイトパレードだ。

所々抜けていて、時に驚くほどに察しがいい。読めない、と言えはわかるのだろうか……精霊は難しい性格なのだ。

「さて、私はそろそろお昼寝の時間ですね。姫も一緒に？」

「……いえ」

「そうですね、残念ですなの。それでは最後に　水の加護が姫を守りますように」

あたしは一礼をする。

これは、去り際の精霊の、決まり文句だ。意味がないわけではない……これをされたあとは、なにかと良い事はおきたりする。だから敬意を称して、お辞儀をするのが礼儀なのである。

水の精霊は、再び湖に潜り込んでいった。言っていたように、お昼寝をするためだろう。……お誘いを断った理由はこれである。

さすがに、水の中で眠る事はできませんから。永眠はできるけど。

あたしは立ち上がった。

さあ、勇者達に見つかってしまいう前に、ここから離れなくては。姿隠しをしているとはいえ、バレないとは限らない。向こうも一人ぐらい精霊と話せる奴がいるだろうし、ここに来たと話が伝わってしまう……それだけは避けなければ。

そう思って、町と反対方向へ進もうとしたあたしは……小さな異変にふと気付く。

……誰かに見られている、という感じが。

「……」

あたしは立ち止まり、気配を伺った。……この気配は、まだ子供だな。男の子だが、人間……ではない、か？　もしかしたら、ハーフかもしれない。

あたしは気配のあったほうの茂みに、視線を向ける。そして、一言。

「誰だ」

「つえ……あつ！」

バレた事に驚いたのだろう。小さな少年は、勢いあまって躓き、顔面から地に衝突した。

……ふむ、ドジっ子属性とみた。なかなかいい位置にいるではないか。

あたしは少年の元へ行き、蹲ったまま立ち上がらない少年を立たせ、土などを風の魔法ではらう。つぶらな瞳を潤ませたまま、少年は驚きと喜びに顔を綻ばせた。

「すごいお姉ちゃん！ 風の魔法も使えるの？ さっき水の精霊さんと話してたから、てつきり僕と同じ属性だと思ったのに！」

「まあね。あたしに属性はないから、全部使える」

「すごいや！ じゃあ、闇の精霊も？ 光の精霊も？」

「うん、見たよ。大精霊は、闇と光、あと火の三人だけ見た」

「うわあ……… かつこいい」

魔族と人間のハーフで……この少年は、水の属性。親は、水系の魔族だったのだろうか。

「それより、こんな所でなにを？」

「えっ……あ、僕……その。友達が……精霊さんしかいなくて」

それで遊びに来ただけ、先客がいて、精霊はお昼寝をしてしまった……と。

そういうわけか。

「あの……お姉ちゃんつてもしかして？」

「あ、違う違う。あたしは異世界人じゃないよ。母が異世界人で……父上が」

魔王だった、とは言えない。あたしはしょうがなく、魔族とだけ言った。

「魔族……、お父さん、魔族なの？」

「うん」

正確には実の父ではないけれど……まあ、子供に深い話をしてもしようがないだろう。あたしは黙ったまま、瞳をキラキラさせる少年を見つめた。

なかなかのシヨタ。とても好物だ。……誤解を生みそうなので言っておくが、あたしはシヨタをとって食うような危険極まりない人種などではない。だから、視線で犯しておくことにする。

「じゃ、じゃあ……！ 僕と……同じ？ 僕も……お母さんが魔族で、お父さんが人間らしくって」

「……らしい？」

「あつ……うん。僕、孤児院育ちだから……話に聞いたただけなんだ」

少年はそう言うと、モジモジ照れくさそうにして……あたしを上目遣いで見つめた。今思い出したのだが 父上にもよく言われたっけ。魔族の子供を拉致ってはいけないよ、と。

だがしかし、完ぺきな魔族じゃなく、ハーフ。その上……この子は、孤児院育ちと言ったっけ。

……いかにいかに。戻れ、戻るんだあたし。

「あ。君、名前は？ あたしはフィーリア」

そう言えば自己紹介がまだだったと思い、あたしは少しほほ笑みながら言った。ハーフだから魔力にも敏感そうなので、なるべくそれを表に出さないように気を付ける。

少年は一度「フィーリア？ フィーリアお姉ちゃんって呼ぶね！」と、可愛らしく言ったあと これまた輝く笑顔で、自己紹介をしてくれた。

「んとな、僕の名前はガルガント！ 長いからガルって呼んでっ」

「うん。よろしく、ガル」

「よろしくフィーリアお姉ちゃんっ！」

あたしの呼び名も長いんだけど……とは言わず、いちいち可愛い事をしてくれるガルに和みながら、あたしは徐々に安らぎを感じた。

……アイツらといると、気が休まらなかつたんだよね。夜もなかなか眠れなかった。いつ本性を表すのか、警戒していたから。

でも今だけは……それも、必要なさそうだ。

「そういえばお姉ちゃん、どこから来たの？」

「ん？ 魔界だよ」

「魔界！？ すっごい！ 本当に!？」

「うん。魔界からこっちに来て……暮らしてみようかな、って」



本音は……まったく来たくなかったのだけど。しかし魔王亡き今、魔界はとても不安定になっている。少しつづけば消滅してしまうほどに。

しかしこんな出会いがあるならば、それもまた興か……なんて思ってしまう。こうしてこちらにだんだん慣れる事が出来るといいんだけど。そのためには、まず勇者達を振り切らないとね。

あたしはようやく逃げて来た事を思いだし、注意をして辺りを見渡した。近くに人も、いない。まだ追いつかれてはなさそうだ。

そんなあたしの急な行動に疑問を抱いたのか、ガルが、こてんつと首を傾げた。……くっそ、めちやくちや可愛かった今の。

「？ お姉ちゃん？」

「……はっ、それどころじゃなかった」

「えっ……お姉ちゃん、急いでるの？」

「うん、実はちょっとね……勇者達から逃げてんの。ほら、アイツらって魔族が大っ嫌いだからさ……あたし殺されかけて」

「に、逃げて来たの？ 大変！ ……ど、どうしよう……隠れなきゃ……！」

「？ いや、まだそんな気配無いから大丈夫だと」

「さつきね、その、勇者さまが他の水の精霊さんと話してるの見  
たんだ。だから……」

ガルの言いたい事に気付き、あたしはハツとした。そう、彼らは  
誰の味方でも敵でもない……なんでも正直に答えてしまうんだ！  
しかも精霊同士は、以心伝心している。さつきあたしは、この湖に  
いる精霊と話をしてしまったから

！

やばい。

早く逃げないと、再び捕まるっ！

「やばっ どうしよう！ どっちに逃げっ」

「お姉ちゃんこっち！ 孤児院へ行こうっ！」

「あっ、ちょ、ガル!？」

言うのが早いか、ガルはあたしを引っ張って走り出した。ここは、  
ガルの好意に甘えよう たしかにあたしが孤児院にいるなんて、

奴らは思わないだろうし。

私達は勇者に追い付かれませんが、よつにと祈りながら、森の中をひたすら走るのです。

長く続く森。あたしはガルに手を引かれながら、奥へ奥へと進んで行った。

……もう、どのくらい歩いたかも記憶にない。一応魔族と人間のハーフなだけあるのか、ガルはまったく息が切れておらず、まだまだ余裕な顔で走り続けていた。あたしは……ううん、触れないでおこう。惨めになりそうだ。

「あ、見えたよっ。フィーリアお姉ちゃんっ！」

「ごほっごほっ……あ、そう……それは……よかつ、た……！」

限界ギリギリなあたしである。

「ここまで走れば、大丈夫かな……フィーリアお姉ちゃん、歩く？」

「う、うん……歩く………けほっ」

……なんて情けないのだろう。今まさに、父親が本当に魔族であったらよかったのにと思った瞬間だった。というか、魔王な父上が実の父親だったらよかったのに。無理なのは、わかってるんだけどね。

あたしは再びブルーになりつつも、「いや、あたしはたしかに父上の娘だ」と小さく呟いた。その証拠に、ちゃんと黒髪を受け継いだではないか。これ以上、なにを望む？

「あ、あのね、フィーリアお姉ちゃん」

「……えっ？ あ、なに？」

思いに耽り過ぎたのか、咄嗟に反応しきれなかったあたしは、数秒遅れて返事を返した。

……なにやら、ガルまで思い詰めたような顔をしている。あたしの気持ちが移ってしまったのだろうか？ そしたらとても申し訳ない。

けれど、それは杞憂に終わった。

「えっと……」

「？」

「ほ、ほら……僕……魔族と人間とのハーフだから………あんまり孤児院のみんなと、仲良くなくて、その」

「……、うん」

「だ、だから……僕のせいで嫌な思いしたら………ごめんね」

ザクリ　鈍い痛みが胸を貫いた。

こんな……、こんな、まだ幼い子供だというのに。この子はもうこの歳で、そういつた感情を覚えてしまっているのか。なんて非情な世界なのだろう。

あたしは立ち止まる。そして目線を合わせるように屈んでは

ら、しっかりと見据えて……笑顔で言った。

「嫌な思いなんてね、ドンドンさせちゃえばいいんだよ？」

「えっ……で、でも……」

「だってあたし、ガルの友達でしょ？ ……友達ってのはね、迷惑とか楽しいこととか、半分こし合うものなんだよ」

だから、と。あたしは言葉を続ける。

「あたしはガルのせいでどんな思いをしたって構わないし、全然気にしない」

「……」

「ガルもね、あたしがいれば……寂しいのや苦しいの、半分こになるから」

寂しいのや苦しいのが、半分こになる。幼い頃あたしが父上に言われた言葉だ。

母親が何故いないのかと、あたしが寂しくて泣いた時　父上が言ったんだ。「フイーリイ、愛しい娘。お前の寂しい気持ちや、悲しい気持ち……私が半分貰い受けよう。少しは楽になったかな？」と、そう言いながら……あたしと同じく、泣きそうな顔をしていた。

言われた通り、なんだか半分こにされたような気がして……楽になったのを覚えている。父上は魔王だったけど、魔法なんか使わなくてもすごい人なんだ、と思わされた日である。

あたしは、ポロポロと泣き出すガルを抱き締めながら……よしよしと何回も背中を擦った。震える身体をしつかりと抱き、何度も「大丈夫だよ」と問い掛ける。

……可愛いなあ、やっぱり。父上も、泣いてるあたしを見て……こんな風に思っただらうか？　こんな風に、撫でていたんだらうな。

ガルを見てみると、やけに昔の自分が思い出される。自分に似てるっていうの？　……でもそうすると、将来シヨタでなくロリ好きになるってことなのかな。いや、そこまで似たら最早似てるのレベルではないか。

うん。



そうならないように祈ろうか。

「さ、行くところ？ 孤児院にはガルの部屋とかあるの？」

「うん！ あ、あの……みんな一緒に嫌がるから」

「そっか。じゃあ二人でゆったりできるね」

「……！ えへへ、うん！！」

ぬうあああつ！ かーわーえーえー！ もう孤児院なんか行かずに拉致りたい。

……おつと危ない。こんなだから大臣に「犯罪者予備軍」とか言われちゃうんだ。予備軍どころかすでに実行した事ありますがね。まあそれはおいといて。

ああ、そういうえば大臣も、やられちゃったんだよな。……あの、口うるさい頑固じじい 最後の最後父上を守るため、必死に道を塞いでて……殺られちゃったんだっけ。もう、あの人の小言も聞けないのか。

悲しいな。もう、どこにもあたしの仲間がないなんて。……考えれば考えるほど、勇者への恨みがつのって 頭がおかしくなり

そつだ。ま、高貴なる魔族はそんなちつぽけな感情で行動に移したりしませんか！ ふんだ。

あたしはスクツと立ち上がり、今度はガルと手を繋ぎながらゆったりと歩き出した。もう孤児院は見えている。

少し古臭い感じはするけれど、見た目居心地は良さそうな場所だ。……まあ、見た目は、ね。どんな孤児院の管理人が出て来るのだろう？ 入った瞬間、「あら、帰って来たの？」なんてほざきやがったら、もう孤児院ごと燃やして殺ろう。やろう、でなく、殺ろう。ここ重要。

「ただいまー」

パツと手を離して、扉を両手で開けたガル　べ、別に残念なんて思っていない。純粹にシヨックを受けただけです。

ちよつと小さめに呟いたガルだったが、ちゃんと聞こえたのか　中からパタパタと女の人がやって来ていた。一見大人しそうなただの人間の女だが……どうだろう？　こいつも可愛いガルを苛める輩なのか？　だとしたらもちろん、ただじゃおかないけれど。

しかし、あたしの予想とはことごとく杞憂に終わる運命にあるらしい。ガルの言った言葉によって、それが知らされた。

「あつ、ただいまお母さん！」

「もう！ また勝手に出掛けて！ 何度も危ないって言ったでしようがっ」

お……お母さん！？

あたしは仰天して、二度見ならぬ三度見をしてしまった。だって本当にビツクリしたんだもの。

でもあたしは、途中で「あれ……？」と気付き始める。さっきガルの聞いた話では、たしか母親のほうが魔族だったはず。でもこの人はどう見ても……というか、魔族特有の魔力をまったく感じられない。それに聞いた感じだと両親とも、もう他界しているような印象だったのだが……。

あまり聞きやすい内容ではないため、ちょっとためらうあたしでも聞くよりも前に、ガルが説明してくれた。

「フィーリアお姉ちゃん！ この人ね、みんなのお母さんの！」

「えっ？ みんなの？」

「あらあら、ガル、お友達を連れて来たの？ ごめんなさい、森の中大変だったでしょう。はじめまして、私はこの孤児院を切り盛りしてるキュディと申します」

「あ、いえ……ええと……はじめまして、ガルの友達の……フィーリアと言います」

……人間とまともに話す事がなかったので、あたしは少し戸惑う。ガルはハーフだったから、まだ仲間意識はあったんだけど……完全な人間とわかると、どうもね。

若干緊張ぎみになるあたしの横で、ガルは気付かず笑顔で“お母さん”に今日あった事を伝えていた。

精霊に会いに行ったらあたしと出会った事とか、あたしが魔族と人間のハーフだとか、勇者に追われているだとか……それはもうペラペラと。ちよっと焦り始めるあたしを見てか、キュディさんは安心させるようなほほ笑みを浮かべ、言った。

「大丈夫ですよ。落ち着くまで、ここに居て構いませんから。むしろ居ていただいたほうが、ガルのためになりますわ」

この子もハーフで、ちょっと他の子供達と距離がありますからと、キュディさんは困ったように笑った。

ああ、なんだ、よかった。どうやらガルは、一人じゃないよ  
うだ。……あたしと違って。

本当の母親ではないようだが、それでもちちゃんと頼れる大人がいる。……すごく安堵してしまうあたしは、やっぱり心配性で仲間意識が強過ぎるんだろうか？　しかしまあ、納得してしまう。大人までそういう対応だったら、普通帰りたくなかないもんね。うん…… 本当によかった。

あたしはホッとして、ガルの側へと寄る。

「キュディさんもああ言ってくれたし……ガルの部屋にしばらく泊めてもらえるかな？」

「うん！　もちろんっ」

「ありがとう、ガル」

ああ、やっぱり居心地がいいな。なんでだろう？ もしかしたら、キュデイさんの暖かい心のおかげなのかな。人間界でなんか過ごせるはずないと思っていたけれど、なんだか……ここなら大丈夫そう。な気がして来る。

でもま、しばらく置いてもらおうなら……なにか働かないとね。

あたしはさっそく、キュデイさんに「なにかお手伝いできそうなことありませんか？」と聞いた。住まわせてもらおうならばそれ相当の働きをする、これ鉄則！

「あら、嬉しいわ。一人でやっているからとっても助かるの。そうねえ」

「えー！ フィーリアお姉ちゃん、僕のお部屋で遊ばないの？」

「ふふふ……もう、ガルったらわがままね。フィーリアさん、今日はぜひこの子と遊んであげてくれませんか？」

「えっ、でも……」

「明日から、ちょこっとだけ手伝ってください。今日はお客さんとして、ね？」

……小首を傾げながら、優しくほほ笑まれる。大人しく頷いてしまつあたり、なんだかこの人には逆らえそうにないと思った。

これが……“お母さん”、なのかな。

「わーいっ！ お姉ちゃん、行こっ」

「うん！ じゃあすいません、お邪魔します」

「ふふ、違うでしょう？ 帰って来たら、“ただいま”よ。あつ、でも今日はお客さんだったわね。明日からは、ただいま、よ？」

あたしは照れくさそうに、「はい」と頷く。すぐくムズムズするけれど、それが不快感じやないことだけはわかった。明日からは……ただいまになる、か。

魔界にある家に帰っても、そんなことを言ってくれる人はもういないから……なんだか少し、嬉しいな。でもやっぱり、照れくさいよ。

「フィーリアお姉ちゃん、早くーっ」

「はいはい。今行くって」

でも。

この繋がりが、のちに“人間はやはり愚かだった”という風に、強く思わせる事になるなんて……。

この時のあたしは、まったく思わないのです。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3251z/>

---

魔王な義父と勇者なアイツ

2011年12月11日20時48分発行